

この度、

政略結婚することになりました。

目次

この度、 ^{たび} 政略結婚することになりました。	5
番外編 この度、 ^{たび} 愛する人を妻にしまして。	245
番外編 この度、 ^{たび} 二人目を望むことになりました。	265

この度、^{たび}政略結婚することになりました。

プロローグ

信じられない。

この人がお見合い相手だなんて。

成人式以来である古典柄の大振袖を着た佐倉文乃は、座敷個室の『桜の間』で背筋をぴんと伸ばし正座していた。黒髪のレストラングはハーファアップにして髪飾りを付け、残りは背中に流している。着物は仕事柄着慣れているが、可愛らしいピンク色の振袖を身に纏うことは滅多に無かった。息が苦しい。

帯がきついせいだろうか。

文乃の頬は紅潮し、心臓は早鐘を打つ。とてもじゃないが、正面に座る美貌の青年を直視することなどできそうにない。

大事な両親から受け継いだとはいえ、極々平凡な容姿に今日ばかりは自信を失くしてしまいうだ。

カコーン。

タイミング良く鹿威しの音が響き、文乃はできるだけさりげなく、部屋から見える風情ある日本

庭園へと視線を移した。

庭をこんなにじっくりと眺めたのは久しぶり。

東京下町に佇む料亭『さくらや』は、明治時代に創業し百年以上続く老舗日本料理店である。

趣のある門をくぐり石畳の小路を進めば、そこは都会の奥座敷だ。全室中庭に面した個室、雅な数寄屋造りが非日常空間を演出する。

格式の高そうな店構えどおり、一見さんお断りの完全紹介制。政財界をはじめ多くの著名人やセレブから愛され続けるこの店を切り盛りするのは、四代目・佐倉善治郎。文乃の父親だ。

早くに亡くなった母親の代わりに、高校時代から文乃も店を手伝っている。

時代が時代なら、文乃も蝶よ花よとお嬢様として大切に育てられたのだろうが、このご時勢、そうもいかない。

真面目に勉強した上で国公立に絞って大学受験し、奨学金をもらいながら卒業した。恋や遊びも我慢して、儉約に儉約を重ねて生きてきた。

そんな文乃も二十七歳となり、女将業がすっかり板についてきたと言っている。

「この度は、お見合いを受けていただきありがとうございます」

ひと目上で上質だと分かるスーツを着こなすのは、風間ホールディングス社長子息・風間千秋だ。

文乃より二つ年上の二十九歳であるが、非常に落ち着いている。端正な顔立ち、すらりとした長身品のある立ち振る舞い、何から何まで自分とは別の生き物のように文乃には思えた。

自分だけが場違いな存在に思えて、毎日働いている職場にもかかわらず、緊張して冷や汗まで出

てくる始末だ。

文乃は料亭『さくらや』にて、お見合いの真つ最中だった。しかも仲人は早々に離席し二人きりにされてしまった。

「こちらこそ、良縁をありがとうございます」

文乃は座布団から降りると、両手を膝の前につき頭を下げる。女将らしい美しい所作だ。

——良縁とはいえ政略結婚だけ。

心の中では複雑な思いが渦巻く。

「では、話を進めてもよろしいのですね」

千秋の声は事務的で冷たかった。

愛のない結婚をするのだ。相手にも同じように割り切れない思いがあるのだろう。文乃は頭を下げたまま「はい」と小さく返した。

老舗料亭『さくらや』は、経営不振に陥り火の車だった。

この結婚が成立すれば、『さくらや』を畳まずに済む。四代目は、風間ホールディングスに買収してもらい営業を続けていく道を選んだ。そうなれば従業員達も失業を免れる。

大手外食企業の風間ホールディングスは、料亭『さくらや』という老舗のネームバリューを買い、海外進出に役立てるつもりだ。

友好的買収であるのは間違いないが、さらなるイメージ戦略として文乃と千秋は結婚することになった。

老舗の名を金のために売ったとなれば格が下がる。常連客の反感を買うかもしれない。そうなれば風間ホールディングスはリスクを負うことになる。店の評判が悪くなれば株価に影響が出るだろう。

買収の結果世間のイメージが悪くなったとしても、美男の夫と庶民的な妻の間に子供が産まれればまた風向きは変わる。政略結婚は言わば保険のようなものだ。

「本当に構わないのか？」

凄みのある声に驚いて顔を上げると、漆塗りの座卓の向こうにいた千秋がいつの間にか目の前に移動していた。その表情は文乃の決意を疑っているようにも見える。

この人は覚えていないのかもしれない。

私の好意にも気づいていないのだ。

酔っぱらいに絡まれているところを、料亭の馴染み客である千秋に助けてもらったことがある。文乃はその恩を忘れてはいなかった。

余程のことがない限り、文乃は客相手に大声を出すことはできない。ましてや、料亭の女将という立場だ。酔っ払いの一人や二人、上手にあしらえてこそ一人前。

文乃はあの日の出来事を振り返る。

『若い女将の肌は綺麗だなあ』

白髪交じりの頭髮に小太りの男性客が、千鳥足で文乃を追いかけてきた。男性はお得意様である風間ホールディングス社員の同伴客だ。それなりに社会的地位のある人物だろう。事を荒立てるわ

けにはいかなかった。

どうしようかと迷っているうちに、廊下の端に追い詰められた。身体に触れられそうになったが、逃れようにも恐怖で動けなくなった。

『いい加減にしろ』

文乃の耳に男性の低い声が届く。

『イテテテ！』

酔っ払い客の腕を捻り上げたのは、千秋だった。風間ホールディングスの御曹司であり常務取締役兼COO（最高執行責任者）という身分を、当時の文乃は知らなかった。

『後は俺に任せて、あなたは行って下さい』

『で、でも』

『早く』

『……はい。ありがとうございます』

それから二人の間でどのような話し合いが持たれたのかは分からないが、後日、酔っぱらい客は菓子折りを持って謝罪に来た。

文乃の心に、特別な感情が湧き上がる。

事なきを得たのはあの人のおかげだ。

もう一度会いたい。

ただど待つことしかできない。

勤務先に連絡するわけにはいかない。

いつも会社名と秘書の名前で予約を受けるため、本名だつて知らない。

そうして待ち続けた人とお見合いの席で会えたことは、文乃にとって奇跡だった。

「風間さん、私……」

再会できたら、まずきちんと御礼を言いたいと思っていた。

「相変わらず……、あなたは何も分かっていないようだ」

しかし、失望したかのような千秋の声色に文乃は戸惑った。

「どういう意味でしょう？」

覚悟ならとづくにできている。

今さら逃げ出すほど子供じゃない。

「こういう意味です」

千秋は文乃の顎に手をかけ顔を持ち上げる。驚いて目を見開いたところで、傾けられた美しい顔が覆い被さった。

柔らかい、そして温かい。

千秋の唇が触れた時、ファーストキスであるのに、文乃は意外に冷静にそんな感想を持った。

世間的にはアラサーと呼ばれる年代であるが、文乃の恋愛経験値は中学生以下だ。学業と料亭の手伝いが忙しく、青春どころではなかった。つまり、呼吸のタイミングが分からない。

「はあっ………！」

唇が離れたところで文乃はやつと息を吐く。

文乃は上気した顔で千秋を見返した。

「気の強いお嬢さんだな」

切れ長の二重まぶたは、時として他人に良くない印象を与えるのを知っている。

千秋は、睨みつけられたと誤解したのかもしれない。厳しい顔つきで眉間に皺を寄せ、いきなり何かに焚き付けられたかのように文乃を抱き寄せた。

そして再び唇が押し付けられる。一度目のキスよりさらに強引だった。

「んんっ……」

執拗に、そして丁寧な唇が触れては離れる。

離れてもすぐに塞がれる。

そうされるのは決して嫌ではない。

文乃は唇が離れるたびに、甘い感触を待ちわびてしまった。すでに一方的なキスとは言えない。

「抵抗しないんだな」

「ん……はあっ」

次第に触れている時間は長くなり、文乃の頭はぼんやりとし始めた。

気持ち、いい。

文乃の唇から力が抜けたのを見計らったように、千秋の舌先が分け入ってきた。口内に遠慮なく侵入した舌は、素早く歯の裏を撫でる。こんなことをされたのははじめてで、文乃は小さく震えた。

それを感じとったのか、千秋の手のひらが文乃の肩を撫でる。

次第に身体が熱を帯び始め、文乃は慌てた。

「い、いけませんっ」

これ以上続けられると気が変になりそうだ。

文乃は顔を背け、千秋の口を手で押さえた。

「あっ……！」

すると今度は、文乃の人差し指に千秋の湿った唇が吸い付いた。さらに濡れた舌が絡む。

吸われ舐められるうちに、指先が甘く痺れていった。

どうにかなりそう――

文乃には、身体を駆け巡るヒリッとした、しかし蕩けるような感覚がなんなのか分からない。切ないような苦しいような感情に翻弄される。

「もう、だめ、です」

はあはあ、と文乃が息を荒らげながら言うと、唾えられていた指が自由になる。

「こういうことされるなんて、考えもしなかったんですよ。結婚するっていうのは、俺とセックスするってことですよ？」

千秋の口ぶりはからかうようでいて、論すようでもあった。

「分かっています。ただ、お店ではだめです。父や他の者がいますから」

文乃は真っ赤になりながらもしっかりと答えた。

結婚すればこういうことやそれ以上のことが待っている。
経験がないとはいえ、セックスがなんなのかくらいは知っている。

千秋は驚いた顔をした後、口元を隠して肩を揺らし始めた。声を押し殺して笑っているようだ。
「私、何かおかしなことを言いましたか？」

「いいえ」

「だって、笑っているじゃないですか」

「楽しくなっただけです。今日の続きは、誰もいないところで」

笑いを必死に堪える千秋の優しく細められた目を見て、文乃の心が少しだけ解れた。

「あの、これから、うちの店は？」

しかしそう口にした途端、千秋の表情は一転して引き締まる。

「必ず、再建します」

千秋の言葉は心強かったが、気持ちは遠くにあるように感じた。

第一章 この度、政略結婚することになりまして。

「まだ夜は冷えますから、どうぞお身体をお厭い下さいね」

「ありがとうございます。女将も風邪引かないように」

文乃の心遣いに常連客は微笑んだ。会社経営者の六十代男性は、文乃の祖父の代からのご臈屑さんである。
「ありがとうございます。またお越し下さいませ」

最後の客が店を出たあとも、玄関先で正座した文乃は頭を下げ続けた。外では仲居達が、客が石畳を進み料亭の敷地を出るまで見送っているはずだ。

（出迎え三步、見送り七歩）

文乃は心の中で呟いた。

それは、先代の女将である文乃の母親から教わった言葉だ。心を込めて迎えることは勿論、さらに丁寧にお見送りするのが大事という意味合いである。

「さて、店じまご」

文乃は従業員達と一緒に片付けと掃除を終えると、小紋の着物から洋服に着替え、帰り支度を済ませた。無くさないよう外しておいた結婚指輪を嵌めて更衣室を出る。

そこで厨房から漏れる灯りに気づいた。

「お疲れさまです」

声をかけて文乃は顔を覗かせる。いつも通り厨房はピカピカに磨かれ、整理整頓されていた。

「文乃お嬢さん、お疲れさまです」

女将の文乃をお嬢さんと呼ぶのは、若いが腕のいい板前・鈴木涼太だ。文乃より二つ年下の二十五歳で、高校を卒業してすぐ『さくらや』にやってきて修業を始めた。四代目で板長でもある

文乃の父は板前としての涼太を買っており、本当なら文乃と結婚させて店を継がせたかったようだ。経営権は風間に移ったが、『さくらや』の味を継ぐのは涼太しかいない。文乃にとっても、涼太は大事な弟のような存在だ。『さくらや』の看板と涼太を守るのも、女将である自分の仕事だと考えていた。

「一人で残っているの？」

「はい。板長には先に帰っていただきました。もう仕込みも自分だけでできます」

「立派になったのね」

文乃がしみじみと言うと、涼太は嬉しそうに真っ白な歯を見せて笑った。

「まだまだっすよ」

爽やかな外見通り誠実な青年は、『さくらや』の料理人にふさわしいと文乃は思いを新たにす。

「これからも、父や店をよろしくお願いします」

文乃は涼太に頭を下げた。

「や、やめて下さい。お嬢さんにそんなことさせたら、俺のほうが叱られます」

慌てる涼太に、文乃は「ふふっ」と笑った。

「お嬢さんは幸せですか？」

不意に涼太が真面目な顔をする。

「どうしたの、突然」

「お嬢さんが、俺達のために無理しているんじゃないかって、従業員は皆心配しています」

「そんなことない」

文乃はきっぱりと言いつ切った。

「私は幸せです。全部、風間さん……、夫の千秋さんのおかげです」

「そ、そうっすか。なら、いいんです」

惚気られた涼太のほうが、照れくさそうに短髪の頭をかいた。

千秋のおかげ、それは文乃の本心だ。『さくらや』を助け、従業員を救ってくれた風間ホールディングスや千秋には感謝してもきれない。

「それじゃあ、お先に失礼します」

厨房を出て廊下を進むと「女将さん」と呼び止められる。四十代のベテラン仲居である村瀬が、

難しそうな顔をして近寄ってきた。

「村瀬さん、どうしました？」

「こんなこと、今の女将さんに聞くのもなんですけど……。私達の時給が下がるって本当ですか？」
(どうとう来た……)

文乃はゴクリと唾を呑む。千秋から経営や給料のことで従業員から何か聞かれても知らぬ存ぜぬを通すよう、念を押されているのだ。

「仕事内容は変わらないのに給料が減るなんて、横暴すぎませんか。女将さんのほうから、なんとか口添えしていただけないでしょうか」

村瀬の口調は厳しかった。

「近いうちに風間から担当者が店に来て、説明会を開くと聞いています。質疑応答の時間もあるようですから、その時に」

文乃は動揺を悟られないよう落ち着いて告げる。

「……そうですね。分かりました」

不満はあれど、村瀬もここは引き下がるしかないと言ったようだ。

村瀬の姿が見えなくなると、文乃はスマホを取り出し早速メッセージを送った。勿論、相手は千秋だ。

『従業員から時給の件で質問がありました。どうか早めに今後の経営方針を明らかにして下さい』
早々にメッセージに既読マークが付く。しばらくすると返信が届いた。

『その件は、後日ゆつくりと話しましょう。近いうちに時間を作るつもりです』

「近いうちって、いつだろう……」

他人行儀な文面に、文乃は軽いため息を吐く。

忙しいのは分かっているが、千秋が二人の新居である自宅マンションに戻ることはほとんどなかった。新婚なのに、まだ夫婦らしい会話もない。たまにスマホでメッセージのやりとりをしているが、仕事の話だけだ。

しかしすぐさま、仕方ないと思いつつ直す。

(夫婦とはいえ、私達の関係は普通とは違うから……)

結婚すれば愛が生まれるのかもしれないと期待していたが、甘かった。

正確には、千秋にキスをされて以来、文乃は二人の間に愛が生まれればいいのにと願っていた。我ながら単純だという自覚もある。

文乃の中には日に日に千秋に対する情愛が育っているのに、それは夫婦愛には程遠い単なる片思いのようだった。

(形だけでも、千秋さんのそばにいられるのなら……今は、それで)

ただでさえ、『さくらや』の経営のことで頼り切っている。これ以上迷惑はかけられない。政略結婚が枷となり、文乃は本心を言えずにいた。

S

その後行われた従業員向けの説明会は必要最低限の内容でしかなかった。もつと深い話をしようにもできずに、千秋と会えないまま一週間が経過した。

『羽田空港に着きました。「さくらや」の今後について、食事をしながら話をしましょう。午後六時頃、地図の店で待っています』

いきなり、海外出張で渡米していた千秋からメッセージが届く。

休日なのに予定もなく、部屋でごろごろしていた文乃はひどく焦った。

(今から？ それに、どうして外で会うの?)

話をするのなら、家に帰ってくればいいではないか。疑問に思うが、悠長に考えている場合は

なさそうだ。待ち合わせ時間までのカウントダウンは始まっている。

文乃はスマホをタップし、千秋から指定された店を調べた。

「どうしよう。ドレスコードがありそうなレストラン……」

高級フレンチレストランのサイトを眺めて文乃は途方に暮れる。女将業に邁進してきたことは文乃の誇りだが、その一方でプライベートの極端なひきこもり人生を猛烈に後悔していた。

(着ていく服がない……！)

文乃の人生のイベントにおける服装はいつも着物だった。お見合いも、両家顔合わせも、結婚式も純和風。

和装でもドレスコードに準じれば問題ないだろうが、できることならフレンチレストランに相応しい洋装も着こなせる妻でありたい。

(千秋さんに認められたい)

そんな風に思う自分は、政略結婚した人間としてはおかしいだろうか。

「とにかく、洋服が必要だわ」

着物はいくらでもあるのに、まともな洋服は持っていない。今もくたびれたジーンズにTシャツという格好だ。

母親が生きていれば相談できたのと思うが、すぐに頭を切り替える。

「こんな時は由衣ちゃんだ」

佐藤由衣は『さくらや』のバイト仲居で、二十四歳と年も近いことから文乃にとって話しやすい

相手だった。

由衣に『お知恵を貸して下さい』とメッセージを送り、事情を説明する。文乃らしい固い文面だが、早々に返信は届いた。

『地図の場所は友達のお店です。事情は伝えておきます。そのまま向かって下さい』

文乃はバッグを手にマンションの部屋を出て、由衣の友人が働くセレクトショップを目指した。

その二時間後、高級レストランでも浮かないレディへと文乃は見事に変身する。

代官山のおしゃれなショップで由衣の友人がすすめてくれた服を買い、靴やアクセサリ等の小物類はレンタルした。ありがたいことにヘアメイクはサービ斯拉しい。

スマートエレガンスに合わせた光沢のあるブルーのドレス。前後で丈の違うフィッシュテールは可愛らしく華やかだった。

ストレートの黒髪はゆるく巻かれ、編み込みと合わせたダウンスタイルに。

メイクはキツめの顔立ちが優しく見える淡いカラーで、ナチュラルに仕上がっている。

(私じゃないみたい)

ショーウィンドウに映る自分の姿に、文乃は呆然とした。

「……、急がなきゃ」

千秋との待ち合わせの時間が迫っている。慣れないヒールで文乃は小走りになった。

恵比寿にあるスタイリッシュな複合施設のpromenadeを下り、正面にそびえ立つ城のような建物へ向かっていく。美しくライトアップされた目的のフレンチレストランは堂々としていて、すっ

かり気後れしてしまう。

「フレンチなんて久しぶり」

入り口の前で立ち止まっていると「文乃さんですよね？」と後ろから声がした。

「あ、千秋さん」

振り返ると、千秋がそこにいた。ダークカラーのスーツにシルクのネクタイ、ポケットチーフには控えめな柄がプリントされている。まるでこの城に暮らす貴族のようだ。

久しぶりに見る夫の姿に、文乃は恥ずかしながら見惚れてしまった。

「中で待っていて良かったのに。そんな服装じゃ、まだ寒いでしょう」

五月の夜にオフショルダーのドレスは張り切り過ぎだったかもしれない。

「今、来たところですよ」

「そうですね。じゃあ、一緒に」

千秋が手のひらを差し出した。

「段差があります。暗いので気をつけて」

「ありがとうございます」

文乃は素直に千秋の手を取った。御曹司はエスコートも完璧だ。

意識しないようにすればするほど、かえって文乃の胸はときめいてしまう。こんな素敵な夫を持つていて幸せでないはずがない。

文乃は頬を染めてそつと千秋の横顔を盗み見た。長いまつげ、高い鼻、シャープな顎^{あご}。完成度の

高い造作に思わず溜息が零れそうになる。

「いらつしゃいます」

エントランスに一步踏み入ると、豪華なシャンデリアに螺旋階段^{らせん階段}。美しいフラワーアレンジメントと、エレガントな世界が広がる。

「予約していた風間です」

千秋が告げれば「お待ちしておりました」とスタッフが二階へ案内してくれる。

エレベーターを降りると、ゴールドに輝くグランメゾンが待ち受けていた。バカラのシャンデリアにクリスタルで装飾された壁。老舗料亭^{しほせ}の一人娘である文乃でさえ圧倒される。

奥まった壁際の席に着くと千秋が訊ねてきた。

「お酒は飲めましたよね？」

「はい。嗜^{たしな}む程度ですよ」

「まずはシャンパーニュで乾杯しましょう」

千秋はシャンパンをオーダーした後、ソムリエと相談しながらワインを決めていく。一連の言動はどれも自然でスマートだった。

慣れているのは当然だろう。千秋は御曹司なのだ。

（それに比べて私は経験不足すぎる）

文乃はひきこもり人生を再び反省した。

「今日はいつもと雰囲気違いますね」

千秋の言葉を聞いた途端、露出した首回りや背中が熱を持つ。

着物の帯がただで文乃は頼りない気持ちになった。

「ドレスはまだ着慣れず、すみません。あまりこういうところに来る機会がなくて。これからもっと勉強します」

「似合っています。素敵だ」

熱っぽい瞳で千秋に見つめられ、文乃は頬を染めた。

「そ、そんな。でも……、千秋さんにそう言ってもらえるのが一番嬉しい……です」

文乃は思わず本音を零す。

「それは意外だな。だったらもつと褒めましょうか。ドレスなんか関係ない。あなたは、素材そのものが綺麗です」

「からかわないで下さい」

「からかつてなんかいません。文乃さんはいつも美しい。その輝きは、今夜だけのものじゃない」

御曹司は会話まで上品だ。

全身に千秋の視線を感じ、文乃は羞恥しゆうち心で身悶みもだえしそうになった。

（まるで中身まで覗かれているみたい……！）

「冗談はやめて下さい。千秋さんのまわりには、もつと華やかで美しい女性がたくさんいますよね？ きつとこれまでだって、私なんかよりずっと素敵な人とおつきあいなさったでしょうし……」

文乃は顔を真っ赤に染めて興奮気味に反論する。千秋のような特別な人間には、素朴で地味な女

性は珍しいのかもしれない。

（だからって、からかわないでほしい）

千秋に釣り合うようにドレスアップしてきたが、千秋が本心から気に入る女性になれたとは、とてもではないが思えない。

「俺の女性関係、気になりますか？ 文乃さんが知りたいのなら全て話しますよ」

言いながら千秋は、不敵な笑みを浮かべた。弄もてあそばれているような気持ちになり、文乃は悔しくなる。そのせいで、多少、口調は冷たくなったかもしれない。

「……いいえ、必要ありません。私の関与することではありませんから」

それは文乃の本心でもあった。

千秋は夫であっても一人の人間だ。どんな恋愛をしてきたとしても、それが今の千秋を作っているのだから、口出しするようなことではない。文乃もそのくらいの分別はある。

（過去のことなんて気にしない）

ところが、文乃の割り切りは、千秋には不服だったようだ。

「確かに、文乃さんには関係ないでしょうね。女性はよく、恋愛と結婚は別だと言いますし」

その声はいかにも不機嫌そうである。

「だから、俺と結婚したんでしょう？」

「えっ……」

千秋の問いに、文乃は肯定も否定もできない。恋愛結婚したわけではないのだから、別だと言わ

ればそうかもしれない。とはいえ文乃は、千秋に対して少なからず好意を抱いている。

「あ、あの……それは……」

「気にする必要ありませんよ。お互い納得して結婚したんですから」

千秋の笑顔はどこか空々しく文乃は気まずい気分になる。政略結婚を受け入れた事実を、今さら覆すことはできない。

「あ、あの、お店は……」

いたたまれなくなつた文乃は、無理やり話題を変えてしまった。

「……店？」

「経営方針のことです……。先日の説明会のあとも、従業員達から戸惑いの声があがっています。会社の決定に温情のようなものが感じられないと」

自分で話し出して、今更ながらに気が付いた。そうだ、今夜は、『さくらや』の話をするためにここへ来たのだ。文乃はうっかり舞い上がってしまった自分を恥じた。

「仕事の話か……。そうですね。俺がどんな女性とつきあつていようが、文乃さんには関係ない。

たとえば、俺達が夫婦でもね。文乃さんにとって大事なのは、『さくらや』のほうだ」

ついさつきまで魅惑的に輝いていた千秋の表情が、あつという間に冷めていく。

（千秋さんがどんな女性とつきあつていても、私には関係ない……？）

千秋の台詞の真意が分ならず文乃は戸惑う。

（夫婦であつても？ 過去の話じゃないの？）

文乃は激しくなる動悸を感じながら、黙り込む。運ばれてきた食事も味がせず、どうにかマナーだけは守つてフォークとナイフを動かす。

それに引き替え、千秋はどこまでも冷静だった。

「さて、仕事の話をしでしょうか」

口元をナプキンで拭い、千秋は背筋を正した。文乃も表情を引き締める。

「まず、長く勤務されていると言っても、今の仕事量では仲居の時給に問題があります。売上の低迷が続く中、人件費に関しては毎年上昇し、『さくらや』の年間赤字はすでに三千万円を超えています。まずは従業員の給与を見直すべきです」

経営に関与してこなかつた文乃にとって経営難という認識はあつても具体的な金額は寝耳に水だった。

「次に、週に数日、まったく客の来ない日がありますね。完全予約制は夜だけにして、昼は若干値段を抑えたメニューも提供してみようと考えています」

千秋の提案を、頑固な父親が認めるかどうかは分からない。文乃は頭を悩ませた。

話を聞いて頷くだけでは、女将として妻として不甲斐ない。しかし、様々な思いが渦巻いて相応しい答えを導き出せず、時間だけが過ぎていく。

食事を終えてレストランを出たあとも、文乃はもやもやとした気持ちを払拭できなかった。

「車を呼んでいます。迎えが来るまで少し歩きませんか？ 『さくらや』のことは任せて下さい。

業績が上がれば一番に従業員へ還元すると約束します」

それから千秋は、自分の上着を文乃の肩にかけた。
「だ、大丈夫です」

アルコールのせいかな寒くはない。

文乃は上着を返そうとするが、千秋はそれに応じなかった。

「俺が嫌なんです。他人に自分の妻をじろじろ見られるのが」

「じろじろ？」

「さつきすれ違ったカップルの男性が見ていました」

文乃はまったく気づかなかった。

千秋には意外と神経質なところがあるようだ。

新しい発見をしたようで、文乃は思わず微笑んだ。

「すみません。あなたのこと、自分の所有物のような言い方をして」

「い、いいえ。私のほうこそ鈍感な妻で申し訳ありません」

「焦る必要はない……」

独り言のように千秋が言う。

「えっ？」

意味が分からずに文乃は聞き返した。

「なんでもありません。そうだ、プレゼントがあります。ジャケットの内ポケットを探してもらえますか」

言われた通り文乃は内ポケットに手を入れ、スカイブルーの小箱を取り出した。

「これは？」

「ニューヨーク土産の定番です」

文乃もよく知る高級ブランドのロゴが目に入った。促されるままに開けてみれば、一連ダイヤのネックレスが顔を出す。

もちろん、こんな値の張るアクセサリをプレゼントされるのは初めてだ。百万円は下らないはずの高価な土産に驚き、文乃は御礼を言い忘れる。

「つけてみませんか？」

「……あ、はい……でも……」

「貸して下さい」

有無を言わずさぬ調子で、千秋はダイヤのネックレスを手にして文乃の背後に回る。

ネックレスが触れ胸元がひやりとし、文乃は緊張を高めた。

「髪を上げてもらっていいですか？」

文乃は長い髪を持ち上げる。すると、うなじに温かなものを感じた。

千秋の吐いた息かもしれない。

首のすぐ後ろに、千秋の顔や指がある。

触れそうで触れない距離に、もどかしさが募った。

触れてくれたらいいのに。

触れてほしい――

だけど、そんなことはとても口にできない。

「できました」

当然ながら肌に触れられることはなかった。

千秋は文乃の正面に回り、全体を眺める。

「いいですね。とても似合っています」

「あ、ありがとうございます」

結婚式にはじまり、婚約指輪や結婚指輪、そして新居まで、あつという間に全てを準備してもらい、それらにいくらかかったのか文乃は詳細を知らない。千秋に甘えっぱなしだ。

「だけど、こんな高価なもの、私には必要ありませんので」

すると千秋がかすかに残念そうな顔をする。それに気づいた文乃は、慌てて取り繕つくろおうとしたが遅かった。

「これから気をつけます」

「あ、あの、そういう意味じゃなくて」

「車が来たようだ。行きましよう」

千秋が手を差し出す。

「はい……」

文乃が千秋の手を取ると、優しく握り返された。高鳴る胸に気づいた文乃は、これは特別なこと

ではないと自分に言い聞かせる。

（千秋さんにとっては、普通のこと……）

無言のままライトアップされた緑の中をゆっくりと歩いていく。

文乃は千秋の『焦る必要はない』という言葉葉を思い出していた。

（……もともと、愛はなかったのだから）

歩くスピードと同じくらいでいい。互いの気持ち近づいていけばいい。

男女の愛でなくとも、きつと家族にはなれるはず。好意以前に純粹に千秋のことを人として尊敬している文乃は、この政略結婚を前向きに捉えようと思った。

（これからの長い人生を同志として歩めばいい）

手のひらに千秋の温もりを感じながら、きつとうまくいくはずと、文乃は未来を信じようとしていた。そのまま運転手付きの車で送ってもらい、午後十時半、文乃はマンションに到着する。

「では、まだ仕事がありますので、これで」

千秋は後部座席に座ったまま、軽く文乃に向かって手をあげた。

「……はい。おやすみなさい」

「おやすみ」

運転手がドアを開け、文乃は車から降りた。そんな文乃を確かめるでもなく、千秋はすでに前方を向いている。

（素っ気ない……）

そもそもこんな時間に、どこでどんな仕事があるというのだろう。

『俺がどんな女性とつきあっているように、文乃さんには関係ない』

千秋の言葉が文乃の脳裏に蘇る。

(まさか、別の女性が待って……?)

すでに出発した車のテールランプを目で追いながら、文乃は不安な気持ちになる。

たとえば千秋に自分以外の女性がいたとして、不貞を責めることができるのだろうか。『さくらや』の再建に尽力する千秋は、政略結婚の約束事をきちんと果たしている。

(……不貞になるの？ 筋違いなのは私のほうかも)

無理やり千秋を縛ろうとしているのは自分じゃないだろうか。

文乃は複雑な思いを抱えたまま、一人寂しく部屋に戻るのだった。

S

その後も千秋がマンションに戻ってくることはないまま、半月が経過した。

(もうこんな時間だ。そろそろ寝ないと遅刻する！)

高級ホテルのような広々としたパウダールームの鏡に映るのは、ぼさぼさ頭にすつぴん黒縁眼鏡、上下グレーのスウェットを着た干物女子だった。

早番の今日は十時前には店に着いていなければならぬが、すでに時計は午前三時を回っていた。

「大丈夫。まだ五時間は眠れる」

文乃は片方の手を腰に当て豪快に歯磨きを始めた。

そして、帰らぬ夫に嘆息する。

(一応は新婚なのに。無断外泊はこれで何度目だろう)

先々週フレンチレストランで会って以来、文乃はほとんど千秋の顔を見ていない。

缶チューハイをちびちびやりながら今宵も待つてはみたものの、やはり無駄骨だったようだ。

文乃は千秋がいない生活に慣れて、いつしか実家から持ってきたスウェットでまったり過ごすようになってしまった。

(どうやら順能力は高いみたい……)

新居は東京都港区にあるタワーマンション。玄関に入って右手に扉は二つ。一つがパウダールームと浴室、もう一つはトイレだ。パウダールームと寝室は繋がっている。正面にも扉が二つ。それぞれリビングとゲストルームへ続く扉だ。そして左手の扉は廊下兼用のウォークスルークローゼット。その先には千秋の書斎がある。

百平米はある3LDKと四十五階からの眺望に、何一つ不満はない。

「こんな部屋、私一人じゃもったいないな」

不意に実家の父親や祖父、それから飼い猫に会いたくなった。

(ホームシックかもしれない)

文乃はこれまでの二十七年間、実家を一度も出たことがなかったのだ。

うがいをし、口元をタオルで拭いたところで、ふと思い出す。

千秋が文乃の唇に触れたのは、お見合いの席でのたった一回だけだということを。

唇に情熱的なキスの感触が蘇る。千秋にすればただの悪ふざけだったのかもしれないが、文乃にとつては特別な出来事だ。

「ああ、もう。今さら考えたって仕方ないでしょ！」

文乃はタオルを洗濯機に放り込んだ。

料亭の女将おかみにしては細やかさに欠けるかもしれないが、クヨクヨしない大雑把な性格が幸いして、文乃は明るく生きていた。

パウダールームを出ると、玄関ドアが乱暴に閉まる音が耳に届く。この部屋に戻ってくるのは、千秋以外に考えられない。

「あっ……！」

そこで、ふらふらと廊下をやってくる千秋と目が合った。

「お、おかえりなさいませ」

文乃は驚いた表情のまま千秋を迎える。

「文乃さん？」

スウェット姿の妻を初めて目にした千秋は、困惑しているようだった。

「すみません。リラククスしすぎました」

「構いませんよ。ここはあなたの部屋ですから」

千秋は抑揚のない声で言うと、文乃の横を通り過ぎていく。

ふと、アルコールの匂いが鼻先を掠めた。

(随分と飲んでいるみたい？)

覚束おぼろない足取りが気になり、文乃は背後から千秋の脇に潜り込み身体を支えた。

「寝室まで一緒に」

この程度の気遣いは女将おかみならば持ち得て当然だ。

「……………」

千秋は何も言わないが、少しだけ文乃に体重を掛けてきた。身長は高いけれどずいぶん細身だ。

そのため、千秋を支えるくらいにしたいしたことないと思っていた文乃だが――

(見た目より重たい……細いのには嬉しい)

予想以上に筋肉質な千秋の身体に動揺しつつ、文乃は腰に手を回してそのまま寝室へと向かった。ベッドの端に千秋を座らせ、ここからどうしようかと迷う。

二人で眠るためのキングサイズのベッドに問題はない。問題があるとすれば、ベッドを共にする

夫婦の間に愛がないということだ。

「ここは、文乃さん、あなたの寝室でしょう。俺は書斎で眠ります」

千秋はネクタイを緩めながら、疲れた声で言う。

「どうして？ ここは二人の寝室です」

文乃を見て千秋は複雑な表情を浮かべた。

文乃にすれば当然のことを言ったつもりである。深い意味はなかったが、改めて思い返して動揺した。これでは、文乃から千秋を誘っているようなものだ。

「あ、あの……、そういうつもりじゃ……」

「すみません。泥酔した姿で帰るつもりはなかったんですが、あなたの顔が急に見たくなって」
思いがけない言葉に、文乃は胸の高鳴りを覚える。嬉しくなり、自然と思いが溢れた。

「私も千秋さんの顔が見たかった……」

「それは本心？ 『さくらや』のため？」

ところが千秋は、眉をひそめ難しい顔つきになるのだ。

「あ、あの……」

文乃は、千秋の問いにどう答えればいいのか分からない。

本心であることを伝えようとしますが、千秋が信じてくれるような言葉は思い浮かばなかった。

(ただ会いたかった……)

もしそう言ったら、千秋はどう思うだろう。

(いつも、そばにいたい)

忙しい千秋に迷惑をかけないだろうか。

「ごめん。いいんだ。どっちだって」

千秋の両腕が唐突に文乃の腰に回った。強く引き寄せられたことでふらつき、文乃も千秋にしがみつく。

文乃の胸の中にすっぽりと千秋の顔が埋まった。

自分の激しい鼓動が千秋に聞こえているかと思うと平静でいられない。

スウェット越し、胸のふくらみに熱い吐息を感じる。

もっと夫である千秋を感じたい。できるなら素肌を感じたい。淫らだと思われるだろうか。

(ちゃんと妻にしてほしい……)

愛がなくてもかまわない。しかし、どうすれば本当の妻にしてもらえるのか、文乃にはまったく分からなかった。

だが、その時は唐突に訪れた。

「これ以上、理性を保てそうにない」

「あっ……!!」

千秋はやや強引に、文乃をベッドへと押し倒す。文乃の顔から眼鏡を外しサイドテーブルに置いた。そして文乃の頭を撫でると、骨ばった指に髪を絡めた。

文乃はされるがままだ。しかも、心はその先を期待している。

(妻にして下さい……)

文乃は千秋の首に腕をまわした。自分はこんな風に抱かれるのを待ち望んでいたのだと思い知る。

「文乃さんは、綺麗だ。いや、今日はいつもより幼くて、それも可愛い」

(お酒の匂いにする……)

首筋に顔を埋められ、文乃は緊張感を高める。

「嫌だったら言ってくれ。こんな言い方、失礼かもしれない。だけど俺は……文乃さんを俺だけのものにしたい」

千秋の真剣な眼差しに、文乃の心は高揚していった。

「私は……千秋さんだけのものです……」

酔っぱらい客から守ってもらったあの日から、とつくに心は千秋に囚われている。

千秋の手が、文乃の頬に触れた。

「ありがとう。大事にするから……俺に全部見せて」

熱の籠もった口付けが落とされた。

「……んっ」

愛らしい音を立てながら、啄むような優しいキスが繰り返される。

ベッドの上、文乃と千秋の視線は絡み合ったままだ。

眼鏡が無くてもこれだけ近くであれば、文乃にも千秋の表情は分かる。千秋はそれまで見たことのない男の色香を放っていた。

「文乃……可愛い……俺の文乃」

千秋の呼びかけに応じる間もなく、文乃の唇は再び塞がれた。隙をつけて千秋の舌が口内に侵入する。捌め捕られた文乃の舌は、すっかり千秋に翻弄されていた。

(やだ……変な気持ちになる)

淫靡な水音とともに粘膜を擦られる。強まっていく刺激から逃れようと、文乃は身を振った。し

かし、捕らえられた身体に自由はない。

お腹の辺りに冷たい空気を感じると同時に、千秋の手がスウェットの中に滑り込んできた。

「やっ……あ……」

千秋の指は直にふくらみに触れてきた。その瞬間、ブラをつけていなかったことを思い出す。恥ずかしさのあまり、文乃の全身がかつと火照った。

「痛かったら言って」

千秋は貪るようなキスを続けながら、文乃の胸を揉みほぐす。たとえ痛みがあったとしても、声にする余裕もないほどに文乃の口の中は千秋でいっぱいだ。優しく、時に激しい千秋の手の動きは、文乃がまだ知らない快感を連れてくる。

「……あっ、ん、んっ……」

自然と溢れる甘い呻きに、文乃自身が一番驚いていた。

(……恥ずかしい)

そう思うのに、どうしても声が漏れてしまう。

「……ん、ふう……っ」

「気持ちいい？」

唇が不意に解かれた。問われる間も胸は撫で上げられ、先端を指が掠める。身体の奥がむずむずするのを止められずに文乃は戸惑った。

行為に対する恥ずかしさから、文乃はなんと答えればいいのか分からない。ただ目に涙を溜めて、

千秋を見つめ返すので精一杯だ。

「大丈夫だ……」

千秋の唇がそつと文乃の涙を吸い取った。

「俺に心を開いて。もつと気持ちよくなるから」

スウェットが押し上げられ、胸のふくらみがあらわになった。欲望に支配されつつある千秋の前に晒された無防備な身体を、文乃は必死で隠そうとする。

「だ、だめっ……」

しかし文乃の両手は簡単に捕らえられてしまった。

「恥ずかしがらないで。すごく綺麗だよ……もつと見せてくれ。文乃のすべてを、俺だけのものにしたんだ」

千秋は文乃の両手首を掴んだまま、ふくらみに唇を這わす。皮膚の上を往復するやわらかな感触に、再び身体が疼き始めた。

「……っ、あ、んっ……」

僅かな抵抗など無意味だった。押し寄せる甘い刺激に、やがてまともな思考は出来なくなった。

胸元に千秋を感じると、身体は強張るのに心は弛緩した。

(もつと触れてほしい……)

願った途端、ふくらみに触れるものが唇からしっとりとした舌に変わる。舌の動きは文乃を試しているかのようなだった。ゆるゆると周りを舐め吸い上げるのに、触れてほしい中心にはなかなか到

達しない。

「やっ……、あ、ん……」

文乃は困惑した。

(そこじゃない……どうか核心に触れて)

込み上げてくる切ない気持ちの正体が分からなかった。

(こんな気持ちは初めて……苦しい、助けて)

文乃は無意識に腰を捻り、ねだるような仕草をする。

「……可愛いな」

千秋はやつと敏感な先端を口に含むと軽く吸い上げた。

「ひゃ、あっ……!!」

唐突に刺激が全身を襲い、たまらず文乃は身体をしならせた。

触れてほしいと願ったはずなのに、触れられると逃げたくなる。

しかし千秋はおかまいなしに、卑猥な音を立て胸の先を口の中で弄んだ。もう片方の先端は指で摘まれる。

「や……あ、んっ」

これ以上続いたらおかしくなってしまう。お腹の奥がじんじんし始め、文乃はいやいやと首を振る。

「も、もう……やめ……て……」

文乃の声に気づいた千秋が顔をあげた。

「焦らしているわけじゃないんだ。たっぷり感じさせてやりたいから」

文乃がどれだけ乱れようと、千秋はまだ冷静だった。文乃は少しだけ憎らしくなった。

（私ばかり、おかしくなってる……）

すると今度は、千秋の手がスウェットパンツへと潜り込む。文乃は慌てて膝を閉じようとするが、千秋の脚がそれを許さなかった。

「や、だめえっ……！」

あつという間に秘部を探り当てられ、下着の上から撫でられた。そこがすでにしっとり湿っていることに文乃は動揺する。

（……ど、どうしよう）

千秋の指に擦られ、さらに蜜が溢れ出した。まだ開かれていないその場所も、いずれ千秋にさらけ出さねばならない。

千秋になら全部捧げてもいい、文乃は最初からそのつもりだった。

（落ち着かなければ……）

千秋の指の動きを感じながら、妻として抱かれるために準備したことを振り返る。

ひきこもり人生に終わりを告げ、エステやジムに通い始めた。ファッション雑誌を読むようになり、新しい服や下着も買った。

そこでふと、やがて剥がされるはずの薄い布のことが気になり始める。

文乃は油断してまったく色気のない下着を穿いていることを思い出した。

初夜のために購入したシルクのベビードールは、まだ梱包されたままクローゼットに眠っている。今この瞬間、レースやフリルがたっぷりのランジェリーを身につけていないのが惨めに思えた。

千秋の手が下着にかかったところで、文乃は自分を取り戻す。

「ま、待って下さい！ こ……、これ以上は、まだだめです」

動きを止めた千秋は、目を丸くしていた。

「だめって、文乃さん……」

千秋の言い分はよく分かる。文乃の身体がどういう状態か、ずっと触れていた千秋が一番分かっているはずだった。

（だけど……だめだめ！）

それでも今日の下着で初夜を迎えられない。文乃の決心は固かった。

「……ごめんなさい」

「俺だって、もう」

すると千秋は文乃の手を取り、自身の昂ぶりに触れさせた。

「きゃっ……！」

千秋の股間は想像以上に硬く、そして大きく膨れ上がっていた。さらに文乃の意識は現実に戻っていく。

（嘘……こんなものが私の中に？）

経験はなくても知識はある。文乃はすっかり怯えてしまった。

「と、とても無理です」

「……分かりました」

気怠そうに起き上がりベッドに座り直すと、千秋は大きく息を吐いた。

「ごめんなさい……わ、私、その……」

下着の件をどう説明しようか、文乃は頭を整理しようとするが――

「いえ、気にしないで下さい。俺も酔った勢いですみません。じゃあ、おやすみなさい」

そう言い、あっさりと千秋は部屋を出て行った。

「酔った、勢いで……？」

身体を求められ嬉しかったのも束の間、愛情からではなかったと知り文乃は動揺した。

あれほど濃厚な口付けも、勢いでしかなかったのだと呆然とする。

「……冷静にならなくちゃ」

そう思うのに、心は少しも落ち着かなかった。

「分かってる……。愛情が無くて抱き合えることくらい」

この結婚は、愛情から成り立っているのではない。千秋が結婚相手として選んだのは、文乃ではなく、『さくらや』の娘である。恋愛対象として見られていないことは百も承知だ。

「それでも千秋さんは、寄り添おうとしてくれてるんだ」

抱き合おうとしたのは、千秋なりの誠意なのだ。文乃は信じたかった。愛がなくても夫婦になら

うと努力してくれている千秋に対して、もやもやした気持ちになるのはお門違いだ――

文乃はそう納得して、心を鎮めるのだった。

§

『今日は早めに帰宅します』

スマホに届いた千秋からのメッセージを確認したのはもう何度目だろう。

その日、夫と三日ぶりに会えると、文乃の気持ちは朝から浮ついていて。甘い予感に、自然と顔が緩んでしまう。

（今夜こそ、本物の夫婦に……）

男女の愛情がなくても夫婦になれると信じ、文乃は前向きに千秋との信頼関係を深めていくつもりでいた。何より、千秋と会えることが嬉しい。

早番だった文乃は、すでに仕事を終え自宅マンションに戻っていた。

ピピピピピピ。

キッチンタイマーが鳴ったので、コンロの火を止める。

鍋からパスタの入ったステンレスのかごを取り出したところで、文乃は時計を見た。

「もう七時過ぎてる」

そろそろ千秋が帰ってくる時間だ。

フライパンで熱したオリブオイルへ急いでにんにくを入れる。たちまち食欲を刺激する香りが広がった。

「匂い、つかないかな」

リビングのソファには、取り込んだまま置きっぱなしの洗濯物。気にしながらも、文乃はマイペースに茄子とベーコンを炒めていく。

「にんにくの、香ばしいフレグランスということだ」

新しい生活の中にも、さっそく文乃の陽気な性格が垣間見えていた。

トマトソースの味付けは、塩コショウにコンソメと適当にその辺にあるものを目分量で加える。スプーンでソースを掬い味見する。

「うん。いい感じ」

大雑把な文乃の料理は、奇跡的にいつも美味しく出来上がる。味に満足した文乃は、にんまりと笑みを浮かべた。

「何がいい感じ？」

「きゃっ！」

カウンターに肘をついて千秋がキッチンを覗き見ている。料理に夢中だった文乃は、心臓が飛び出しそうなほど驚いた。

まだスーツ姿ということは帰ってきたばかりだろう。

「いつから……」

「さつき」

「見てないで、声を掛けてくれればいいのに」

「楽しそうだったから」

千秋に見つめられ、文乃の顔は赤くなった。

「すぐに食事にしますね。あ、洗濯物」

文乃は慌ててキッチンを出てリビングのソファへ向かう。だらしないと思われないか冷や汗をかいた。

「待って」

すぐさま千秋に手首を捕らえられる。

「俺にも味見させて」

さらに腰に腕を回され身体を引き寄せられた。気づけば文乃は千秋の胸に抱かれている。百八センチはある長身の千秋の腕から逃れられるはずもない。

「あ、あの……千秋さん？」

文乃が顔を上げると、目の前に千秋がいた。端正な顔立ちにうっかり見惚れていると、問答無用で唇を塞がれた。

(洗濯物……)

普段の生活を知られて、愛想を尽かされないか心配だ。

しかし、唇に千秋の体温を感じるうちに、それどころではなくなる。文乃は夢中で千秋の背中に

腕を回した。

(本当の新婚さんみたい)

千秋からすれば、愛のない結婚生活の中での、せめてもの誠意なのだろう。文乃が感じている甘い空気はきつと錯覚だ。

(……それでもいい)

千秋が義務感で文乃を求めたとしても、受け入れるつもりだった。すると、ますますキスが深くなっていく。

「……っ、……ち、千秋さん……」

苦しくなつて名前を呼ぶと、応えるように舌が唇を割って侵入してきた。

文乃の舌は簡単に搦め捕られる。舌先を吸われ、身体が震えた。

「あっ……ん、んっ」

淡いピンクのシフォンスカートが、千秋によつてたくし上げられる。文乃の内股に手のひらが差し込まれた。

(触れられてしまう……でも今日は平気)

今身につけている総レースの下着は、千秋に暴かれるためのものだった。文乃はこうなることを期待していた。

(だけど……まだ、早い……)

食事も終えていないのにと文乃は困惑する。

口内を愛撫しながら、その一方で器用に指は内股を撫で上げる。少しずつ秘所へと近づいてくる。胸の鼓動が速くなる。唇と同じように下も濡れている。文乃は恥ずかしくなってしまう。

(まだ触れられていないのに……)

下着はすでにぐしょぐしょだった。

千秋の指が足の付け根に到達した。濡れた下着に気づかれてしまう。文乃は身体を強張らせた。

「……いい感じでした」

ところが、これからというところで唇は解放されてしまった。

「あ、あの……」

「トマトソースの味」

目の前にある形の良い唇へと、文乃の視線は釘づけだ。文乃を味わって舌なめずりする千秋の表情に、うっかり見惚れる。

(……千秋さん、色っぼい)

「着替えてきますね」

そう言つて千秋は文乃から身体を離し、リビングを出て行った。残された文乃は、しばらく呆然として動けなかった。

(物足りない……)

文乃はそつと自分の唇に触れる。

もつと味わつてほしかった。

もつと触れてほしかった。

「……何考えてるの、私！」

文乃は、両手で顔を覆って恥ずかしさに耐えるのだった。

(千秋さんが素敵すぎて、理性が飛んだ……)

しばらくして、着替えを済ませた千秋が戻ってきた。

「お待たせしました。いただきましょう」

まだ夢見心地な文乃と違い、千秋は平然とした態度で食事の席に着く。

ダイニングテーブルは、グレーのクロスにホワイトのテーブルランナーでコーディネートされていた。さらにキャンドルや花を飾って豪華に演出してある。

そこで、文乃は小さくため息をつく。

(あーあ……)

肝心の料理が残念なことになってしまつては元も子もない。

「ごめんなさい。パスタ、伸びていますね」

「俺のせいですから、気にしないで下さい」

向かい合わせに座っているが、文乃は千秋の顔をまともに見ることができない。

(妻としての評価を上げようと思ったのに……)

茄子とベーコンのトマトソースパスタは合格点には至らなかった。

落ち込みながらも、パスタを口に運ぶ。

トマトの酸味を舌に感じるたびに、千秋のキスが脳裏に浮かんだ。食事に集中できない。
(キスのことばかり考えてる)

文乃はテーブルの下でスカートをぎゅっと掴んだ。

「文乃さんの味がする」

パスタを口にして、千秋が言った。

「甘くて、酸っぱい、……つてこれ、セクハラ？」

真つ直ぐに文乃を見据え、千秋は余裕の笑みを浮かべる。文乃は再び、濃厚な口付けを思い出して顔を赤らめた。それに気づいたのか、千秋はくすりと笑う。

千秋は見透かしているのかもしれない。文乃が千秋のことばかり考えているのを。

「意地悪……ですわね……」

(狼狽^{うろた}える私を見て、楽しんでいるみたい)

文乃は恥ずかしさといったたまれなさで動揺し、グラスのワインを飲み干した。

「意地悪？ どうして？」

「千秋さんはいつも余裕たつぷりで、私を翻弄するから……」

千秋の言動は、どうしてこれほど心を揺らすのだろう。

(もっと近づきたいのにもどかしい……)

文乃は、自分の中に渦巻く感情に戸惑っていた。さらにグラスにワインを注ぎ喉に流し込む。

「翻弄しているのは文乃さんのほうですよ」